



## ポトマック通信 2016年(平成28年)11月号

編集者・発行人  
ワイルス蓉子(Yoko Wiles)  
Silver Spring, Maryland, USA

それを丸呑みにして支持している戦後生まれの日本の知識人たちの不見識に、誰かが声を挙げないと歴史のなかで真実になってしまうという深い危惧によるものである。そして、今までの経過を調べてみると、私が全然知らなかった、そして知らされなかったアメリカ議会の聴聞会の様子等の詳細が分かるにつれて、これだけ事実が曲げて伝えられていることと、日本人の中にもそれを信じて支持しているグループがいることに、真実は曲げられて伝えられていると、深い危惧を覚えたからである。彼らは、歴史の真実を正そうとする人々のことを「歴史修正主義者」と糾弾するが、彼らこそ歴史の真実を曲げて伝えているのではないかと非常に遺憾に思っている。

そして、この問題を取り上げるには、相当な覚悟を必要とすることも分かった。慰安婦問題を韓国では国を挙げて取り組んでいる。しかし、日本人でこれに反論する人々の身辺は自分で守らなければならないのである。幸い、私は警備の厳しいリタイアメント・コミュニティに住んでいるから出来ることで、今でも郊外の一戸建ての家で一人で住んでいたら、この問題を取り上げる勇気はなかったと思う。

9月26日の産経ニュース(ブログで読む産経新聞)で、昨年12月30日に日韓の間で合意した「慰安婦補償」について、これに反発する韓国国会の野党が、「屈辱的な合意」として政府側証人への批判を強めたというニュースを読んだ。これによれば9月24日に野党主導で閣僚の解任議案が可決されたことに反発した与党のセヌリ党が、各委員会での監査出席をボイコットする異例の事態になったとのことである。そして、野党側の求め

### 慰安婦問題

賠償金を払い謝罪文を送っても

日本叩きに使われる道具

今こそ真相を語ろう

私が「慰安婦問題」をポトマック通信で取り上げ続けよう決心したのは、韓国のやり方があまりにも恥知らずでひどいので、

で元慰安婦の金福童さん(90)のほか、外務省東北アジア局長として合意交渉に拘わった駐シンガポール尹炳世大使、合意に基づき韓国政府が設立した「和解・癒し財団」の金税玄理事長らが出席した。証人の一人、金福童さんは「日本政府は慰安婦問題の歴史を消そうとしている。そして、一言の謝罪もしていない」と合意を批判した。「それでもよくやったと言えるのか」と野党議員に問われた尹大使は「与えられた条件下で最善をつくした」と述べた。彼らのやり取りや、証人として喚問された人の証言を聞いていけば、日本政府は今までに一円の賠償金も謝罪文も送っていないように聞こえる。これでは、日本政府がいくらかお金を出そうと、総理が謝罪文を送ろうと、韓国側は「慰安婦問題」を言い続けるぞという構えであることは明白である。

またアメリカを始め、何の関係もないオーストラリアに慰安婦の像を建て、今度はドイツのフライブルク市にも慰安婦像を建てることを、この市と姉妹都市である韓国の水源市が提案したというニュースを聞いた時には、またまた呆れてしまった。フライブルク市は1989年4月に日本の松山市と姉妹都市の条約を結び、以来2市間の交流が盛んになっている。そして今回、松山市の抗議を受けて、フライブルク市は慰安婦像を建てることを拒否したとのことである。フライブルク市当局者の良識に感謝する。

2007年12月16日の韓国で一番大手の「中央日報」の日本語版に掲載された「米議会で初の慰安婦聴聞会 - 韓国・オランダ人女性3人が証言」という記事が、“なでしこアクション”から送られてきた。“なでしこアクション”は、韓国の慰安婦を使った執拗な

言いつけ外交による日本の汚名を晴らすべく立ち上げられた団体である。勿論、戦後の良識派と称する学者、ことに女性運動家からは、「歴史を修正しようとしている保守派の団体」として批判されている。この「中央日報」の記事によれば、2007年12月15日の午後、米国議会下院の外務委員会アジア太平洋・環境小委員会が米国史上初めて開いた「慰安婦聴聞会」で二人の元韓国慰安婦と一人のオランダ人女性が、日本軍の慰安婦として連行されて受けた侮辱を生々しく語ったとのことである。200席をぎっしり埋めた傍聴客は3時間以上続いた証言を肅然とした雰囲気の中で傾聴したとのことである。議会の公聴会や聴聞会で証言する場合は、どの国籍であろうと右手を挙げて宣誓させられる。彼女たちも勿論、「I swear that the evidence that I shall give will be the truth, the whole truth and nothing but the truth」(真実を、全ての真実を、そして真実以外の何も述べないことを誓います)と、宣誓させられたうえでの証言であろうと思う。そして、戦後オランダの植民地のジャワ島(現在のインドネシア)の捕虜収容所で、オランダ人女性が強制的に兵士の性の相手をさせられたのは事実であり、多くの将校や兵士が戦後Bクラス戦犯として死刑に処せられている。また、韓国の慰安婦に対しては、日本政府は村山総理の時に一人300万円から400万円の補償金と謝罪文を送った。しかし、二人の元慰安婦は聴聞会で日本政府から謝罪文や補償金を受け取ったとは一言も述べていない。それでは、彼女たちの手には日本政府からの補償金は渡らなかつたらしい。以下は二人の韓国女性の、米国下院議員の外交委員会アジア・太平洋環境小委員会における証言である。

李容沫さんの証言：「1944年、16才の時に台湾に慰安婦として連行され、3年間にわたって性的に日本軍兵士にもてあそばされた。2階建ての日本軍の慰安所で一日平均4～5人の兵士に強姦され、お粥で生き延び、何かあるとすぐに暴行されるなど、犬や豚よりもひどい生活だった。日本軍によって“トシコ”と名付けられ、性行為を拒否して電気拷問を受け、韓国語を話すといどく殴られた。父は鬱病で中風になり、その年に亡くなった。日本政府は謝罪したと主張するが、一度も謝罪を受けたことはない。世界的な性的暴行を根絶するためにも、日本は必ず謝罪しなければならない。」

金君子さんの証言：「1942年、16才のときに中国に連行された。一日平均20人、多いときは40人の日本兵を相手に地獄のような生活を送った。日本兵は小さな刃物で私の体を少しずつ切りつけたり、服を激しく破りコンドームも使わずに跳びかかってくる。いっそのこと死んでしまおうと何度も自殺を図ったが、日本軍が見張っていて、そういう機会もなかった。1945年8月の終戦で、日本人が“出て行け”と言ったので、同僚8人と島の白菜を取って食べ、一ヵ月以上も歩いて家に帰った。慰安所に到着した初日に抵抗して殴られ、左耳の鼓膜が破れた。身体にも多くの傷が残っている。」

この聴聞会で、日系3世のマイク・ホンダ議員（民主党）は、「今我々が行動に出なければ、日本政府の謝罪を引き出す歴史的機会を失ってしまう」と、決議案の採択を促した。しかし、ローラ・バーシャル議員（共和党）は、「日本はすでに何度も謝罪している。そういう文書を受け取っている。前世代の過ち

で、日本の現世代が処罰をうけてはならない」と主張した。しかし、この小委員会の聴聞会を進行したファレオマ・バエガ議員（民主党、サモア選出）は「今日の聴聞会で日本軍の蛮行実態が暴露され、日本政府の謝罪・釈明が偽りであることが明らかになったので、今後決議採決に前向きに作用するだろう」と述べ、慰安婦の痛みを理解するという立場を見せた。

（編集者注：ホンダ議員は今年の選挙で落選した。）

議会消息筋は、「この日の聴聞会で日本軍の蛮行実態が暴露され、日本政府の謝罪・釈明が偽りであることが明らかになったため、今後決議案採決に前向きになるだろう」と述べた。加藤良三駐米日本大使はこの日、アジア太平洋小委員会に書簡を送り「日本はすでに慰安婦問題の責任を認め、韓国やフィリピン、台湾、インドネシアなど、慰安婦被害者に補償もした」と述べて、議案採決を阻止する意向を明確にした。

この聴聞会に関する記事を、当時私はアメリカの新聞で読んだことがなかった。私は、ポトマック通信を書くために、ニューヨーク・タイムズ紙、ワシントン・ポスト紙、ウォールストリート・ジャーナル紙、USA Today紙の4紙を毎日読み、時にはロサンゼルス・タイムズ紙やボストン・グローブ紙も読んでいる。しかし、2007年12月頃に、この聴聞会の記事を読んだ記憶がない。9年後に読んで、聴聞会で証言を述べるときに、宣誓させられなかったのかと、韓国の二人の証人の「大嘘」にただただ唖然とするばかりである。

彼女たちの証言の「大嘘」を、一つ一つ明記していくことにする。まず、李容沫さんの

証言であるが、「1944年、16才の時に台湾に連行されて、慰安所で3年間働かされた」と述べている。しかし、戦争は1945年に日本の敗戦で終わったのである。そして、日本の植民地だった台湾からは、全ての日本人（兵士も含めて）は、財産を没収され、日本に引き揚げなければならなかった。そして、どの資料をひっくり返してみても、台湾に兵士専用の慰安所はなかった。だから、彼女は娼妓として台湾の娼家に女術によって連れていかれたのであろう。そして、日本の敗戦によって、台湾は中国に帰属となり、蒋介石総統の率いる国民軍が台湾に乗り込んできた。そして、1945年10月に大陸から移って来た陳儀行政長官によって、大陸系中国人が台湾の行政を握るようになった。そして、1945年10月に台湾の中国による接收が現実化するにつき、日本人を早く本国に帰還させようと考え始めた。そこで、最初に軍人・軍属を優先的に復員させた。その後、1946年2月21日から民間人の日本帰還を開始した。そして、1946年2月21日から同年4月29日までの2ヵ月の間に、28万4150人も日本人を帰還させている。この日本人送還の事実から見ても、李容沫さんが1944年から3年間も台湾の日本兵士の慰安所で働かされたというのは全くの虚偽の証言であることが分かる。

また、金君子さんの証言であるが、まるで日本軍が慰安所を経営していたように語っているが、中国で慰安所を経営していたのは、軍に委託された業者であった。業者にとってそこで働く女性は商品であるから、日本兵が慰安所で慰安婦を傷つけるようなことはできなかった。万一したとしたら、業者からただちに憲兵隊に通報されて、彼は拘引されたこ

とであらう。彼女はどのようにしてこのような嘘の証言を臆面もなく語ったのであろうか。

昭和55年10月23日に光人社から棟田博著「陸軍よもやま物語」発刊された。そして、昭和57年2月10日まで第16刷を重ねている。棟田氏は明治42年11月、岡山県津山市に生まれ、早稲田大学文学部国文科中退、日中戦争が始まると陸軍に召集された。中国に送られて徐州作戦で負傷し、陸軍伍長で除隊。太平洋戦争中は、陸軍報道部員として、南方各地へ従軍。陸軍の表も裏も知り尽くした、所謂ベテラン下士官である。棟田氏の「陸軍よもやま物語」と「続陸軍よもやま物語」を読めば、日本陸軍の裏話が分かる。勿論、慰安所に関する記述もある。

それによれば、日本の内地では、兵隊は日曜日にしか外出が許されなかった。そして外出希望者は外出後の行く先と外出の目的を記入して班長に提出し、外出証の交付を受けるのである。試みに外出簿を見ると、市内見物、後樂園、映画館、図書館、親類訪問などで、カフェーとか遊郭の字は見当たらない。しかし、どの遊郭も日曜日は兵隊の外出日とあって朝から店を開けていた。時々憲兵が入口付近の電柱の陰に隠れている。それは、兵隊がゴム製品を所持しているか抜き打ち検査するためであった。万一所持していなかったら、その場で外出取り消しになった。当時は現在のように性病に対する特効薬がなかった。ことに梅毒に罹れば一生廃人になるから、日本軍は兵士が性病に罹ることを厳しく警戒していた。もし、悪質の性病にかかり、即時除隊となれば、出身地の役所にその旨を通知された。

映画監督の小津安二郎氏は召集されて、軍曹に昇進し中国に送られた。小津氏は戦後中国の慰安所について以下のように記述している。

「これが押すな押すなの大繁盛であるが、猛り狂う意馬心猿も、さらによほどの酩酊力を借りなくて、うかうかと近寄りがたい半島の舞姫たちである。」この記述を読めば、韓国政府が主張するように、無垢な少女連れ出して、強制的に兵士の相手をさせたと言うのは、全くの作り話であることがわかる。

その慰安所の入口に張り出されてあった「心得」に、小津軍曹はことのほか興味を覚えたとみえて、手帖に写し取っている。

- 「1. 不注意のため花柳病に感染したる者は、出身地の市長村長に通報する。
- 「2. 次期作戦準備のため、戦力の保持上、如何なる梅毒地帯をも突貫し得るごとく、防具の装着を確実にすべし。

以下省略。」

これを読んでも分かる通り、日本軍は、兵隊が性病に罹ることを非常に危惧し、罹ったものに対しては、実に不名誉な処罰を与えた。そして、慰安婦に対しても、厳しい検査が定期的に行われた。そして、性病に罹った兵士を出した娼家は厳しい罰則をうけた。14～5才の少女を朝鮮の田舎から連れ出して性病検査もせず、拷問にかけて兵士の相手をさせるというようなことは、到底起こり得なかった。彼女たちは慰安所の経営者にとっては商品なのである。どうして彼女たちを傷つけるようなことをするであろうか。小津安二郎氏や棟田博氏のような事実の生き証人が全て鬼籍に移った70年後に、「元慰安婦」を国際政

治の場に持ち出して証言させるとは、彼女たちの背後でそそのかして日本を卑しめ、金を出させようと意図する勢力があると思われられない。彼らたちのやり方は本当に卑劣だと思う。

そして、元慰安婦と称する女性を聴聞会に招いて、彼女たちの証言だけで、事実の裏付けもなく日本に対する「制裁決議案」を可決するとは、アメリカの議会の品位と信用を問われる問題であると思う。日本人の中にも、これらの元慰安婦の証言内容を信ずる人がおり、「歴史の書き換えを憂慮している」というのには、本当に情けない思いである。歴史の証言者はまだ生きているのである。

2007年3月3日発行の「しんぶん赤旗」に、米国下院議院で採択された決議案の要旨が掲載されている。

「1930年代から第二次世界大戦中を通じてアジア太平洋諸島への植民地支配と戦時占領の期間、日本帝国軍隊が『慰安婦』として性的奴隷を若い女性に強制したことを、日本政府が明確であいまいさのないやり方で公式に認めて謝罪し、歴史上の責任を受け入れるべきであるという下院の意見を支持する。

植民地支配と戦時占領の期間、日本政府は公式に、帝国軍隊の性奴隷にすることを唯一の目的として、若い女性の獲得を委託した。日本政府による軍事的強制売春である『慰安婦』システムは、その残酷さと規模の大きさと前例のないものと考えられる。集団レイプ、強制妊娠中絶、辱めや性暴力をふくみ、結果として死、最終的には自殺に追い込んだ20世紀最大の人身売買事件になった。

日本の学校で使用されている新しい教科書の中には、『慰安婦』の悲劇や第二次世界大

戦中の日本のその他の戦争犯罪を軽視しているものもある。

日本の官民の当局者たちは最近、彼女らの苦難に対し、政府の真摯な謝罪と反省を表明した1993年の河野談話を薄め、もしくは無効にしようとする願望を示している。

日本政府は女性と子供の人身売買を禁止する1921年の国際条約に署名し、武力紛争が女性に与える特別の影響を認識した女性、平和、安全保障に関する2000年の国連安全保障理事会決議1325を支持している。

『慰安婦』の虐待及び被害の償いのための計画と事業の実施を目的として日本政府が主導し、資金の大部分を政府が提供した民間基金『アジア女性基金』の期限は2007年3月31日で終了し、基金は同日付で解散される。このため、以下を、下院の意志として決議する。日本政府は

- (1) 1930年代から第二次世界を通じたアジア太平洋諸島の植民地支配と戦時占領期間、日本帝国軍隊が若い女性を『慰安婦』として世界に知られたる性奴隷を強制したことを、明確に曖昧さのないやり方で公式に認め、謝罪し、歴史的責任を受け入れるべきである。
- (2) 日本国首相の公的な資格で行われる公の声明書として公式の謝罪を行うべきである。
- (3) 日本帝国軍隊のための性の奴隷化及び『慰安婦』の人身売買はなかったと言いかなる主張にたいしても明確、公式に反論すべきである。
- (4) 『慰安婦』に関する国際社会の勧告にしたがい、現在と未来の世代に対し、この恐るべき犯罪についての教育を行うべきである。」

これだけ、虚偽に満ち、日本を卑しめた決議案を読んで、ここまで言われているのかと

驚いた。そして、「しんぶん赤旗」はこの記事の終わりに以下のように述べている。

「決議案が、日本軍による『慰安婦』の強制や奴隷化はなかったとする如何なる主張にたいしても、日本政府は『明確、公式に反論すべきだ』と求めているのである。そのような政治家の言動は国際的に通用しないことを強調したものです。

日本政府は、公聴会を前に、『決議案121は、日本政府が長年かけてすでに行ってきたことを要求し、米外交関係に不利益をもたらす可能性がある』と主張する資料を大手ロビー事務所を通して配布しました。日本政府が、同決議案阻止に動けば動くほど、この問題での日本政府の不誠実な態度を国際的にさらけ出すだけです。」

この「しんぶん赤旗」の記事は、慰安婦は強制連行で性の奴隷だったということを認め、全面的に「元慰安婦」の嘘とは言わないまでも、辻褄の合わない証言を信じているようである。彼らは、自分の国の名誉が、虚偽の証言で傷つけられていることを、残念に思っていないのであろうか。この「しんぶん赤旗」の編集者は本当に日本人なのかと不思議に思う。

そして、最近なでしこアクションから、国連の人権委員会が発表したクマラスワミ報告のなかの元慰安婦の証言の写しが送られてきた。この中の慰安婦の証言は、先にアメリカ議会で行った証言よりもさらにひどい。この証言の内容のひどさは、書くことさえ憚られるくらいである。しかし、実際にかかる証言が国際的の場で語られて、日本の名誉が傷つけられていることに、全く無関心かまたは

この証言を真実と信じている日本人がいるから取り上げることにする。

先ず、クマラスワミ報告とは、国連人権委員会の決議に基づいて提出された女性に対する暴力と、その原因及び結果に関する報告書である。「クマラスワミ報告」は国連人権委員会に任命された特別報告者であるスリ・ランカ出身のラディカ・クマラスワミ (Coomaraswamy) 氏が、現在世界各地で起きている女性問題について特別委員会に提出する報告書である。そして、韓国の市民団体からの「被害者は現在も生存している」という強い働きかけを受けて、「慰安婦問題」が調査され、大韓民国と日本への訪問調査に基づく報告書が国連人権理事会に提出された。そして、クマラスワミ氏自身も韓国と日本を訪れて政府関係者や元慰安婦とも会って報告書を提出しているが、報告書には数多い事実誤認や歪曲が指摘されているとのことである。

これらの元慰安婦の証言は読むのもつらいが、「慰安婦問題」に全く無関心か、または彼女たちの証言を頭から信じている人に真相を伝えるためと、このような誇大証言で我が国が国際政治の場で如何に卑しめられているかを知らせるために書くことにする。

チョン・オクスン (当時74才) の証言：  
「私は1920年12月28日、朝鮮半島の北部、成鏡南道のプンサン郡ファバル村で生まれました。6月のある日、当時13才だった私は畑で働く両親の昼食を用意するため、村の井戸に水くみに行きました。そこで日本人の守備兵の一人に襲われ、連れて行かれたのです。両親は娘に何が起きたのか知らずじまいでした。トラックで警察署に連れて

いかれ、そこで数人の警官にレイプされました。私が泣き叫ぶと、ソックスを口に突っ込まれ、レイプが続きました。警察の署長は私が泣き叫ぶので、左目を殴りつけました。それ以来、私は左目が見えません。

10日ほどして、恵山市の日本陸軍の守備隊に連れて行かれました。ここには、私のような朝鮮人の女の子が400人くらいいて、毎日、5000人を超える日本兵のための性奴隷として働かされました。一日に40人も相手にしたのです。抗議すると、その度になぐられたり、ぼろ切れを口に突っ込まれたりしました。私が言いなりになるまで局部にマッチをあてた兵隊もいます。

私たちと一緒にいた朝鮮人の少女の一人が、なぜ一日に40人も相手にしなければならないのかと聞いたことがあります。彼女を懲らしめるために、中隊長ヤマモトは剣で彼女を打てと命じました。私たちの目の前で、彼女を裸にして手足を縛り、釘の出た板の上に転がし、釘が彼女の血や肉片でおおわれるまでやめませんでした。最後に、彼女の首を切り落としました。ヤマモトは私たちに向かって、『お前らを全員殺すのなんかわけはない。犬を殺すより簡単だ』と言いました。『朝鮮人の女たちが泣いているのは食べるものがないからだ。この人間の肉を煮て食べさせてやれ』と言いました。

(中略)

その守備隊にいた少女の半数以上が殺されたと思います。私は2度逃げ出そうとしましたが、2度とも仲間とともに数日後につかまりました。私たちはさらにひどい拷問を受け、頭を何度も殴られ、今でもその傷が残っています。私の唇の内側や、胸、腹、身体に刺青もしました。私は気を失いました。目が覚めると山の斜面にいたのです。多分死

人として放り出されたのでしょうか。私と一緒にいた少女のうち、生き残ったのは私とク・ハエだけです。山中に住んでいた50才の男性が私たちを見つけて、着る物と食べる物をくれました。故郷へ帰る手助けもしてくれました。私は傷つき石女となって、口もろくに聞けない身体で家に帰ったのです。日本人のための性奴隷として5年間働き、18才になっていました。」

ファン・ソギョン（当時77才）の証言：

「私は1918年11月28日、日雇い労働者の次女として生まれました。平壤市カンドンクのタエリ労働者街に住んでいました。1936年、私が17才の時、村長が家に来てきて工場の仕事見つけてやろうと約束しました。家はとても貧しかったので、給料の良い仕事につけるのは大歓迎でした。日本人のトラックで鉄道の駅まで運ばれると、そこには20人の朝鮮人の女の子がいました。私たちは、汽車に乗せられ、次いでにトラックの乗り換え、数日かかって中国の牡丹江のそばにある大きな家に着きました。そこが工場だと思ったのですが、工場などはどこにもないことが分かりました。中にはわら布団が敷いてあって、ドアには番号がついていました。

何が起きているのか分からないまま、2日待たされたのち、軍服をきて帯剣した兵隊が部屋に入ってきました。『言うとおりにするか、どうだ』と言うや、私の髪を引っ張り、床に押し倒して足を広げろと命じました。私をレイプしたのです。その兵隊が行ってしまうと、外に20人か30人もの男たちが待っているのが見えました。その日、全員がレイプされました。それ以来、私は毎夜、15人から20人に暴行されたのです。

私たちは定期的に検診させられました。病気に罹っているのが分ると、殺されてどこかへ埋められました。ある日、新しく来た少女が、私の隣の部屋いられました。彼女たちは男たちに抵抗しようとして、一人の腕にかみつきました。その後、彼女は中庭に連れ出され、私たち全員が見ている前で剣で首をはねられ、身体を切り刻まれました。」

そして、このクマラスワミ報告は、「上記のことに鑑みて、1996年調査訪問は、第二次世界大戦終結50周年にもあたり、とりわけ意義のある調査旅行になるであろうし、戦時中の軍性奴隷に関する未処理の問題を解決するとともに、生き残っている少数の暴力被害を受けた女性の苦しみに終止符を打つ一助となると考える」と結んでいる。

1915年12月24日に、日本陸軍は、日本内地と同じように第十九師団と第二十師団を日本統治下の朝鮮半島に設置した。第十九師団は朝鮮半島の北部の咸鏡北道の羅南で編成され、歩兵四個連隊が所属していた。これらの連隊の規律は、日本内地の連隊と同じで、兵士は日曜にしか外出を許されなかったし、勿論兵士専用の慰安所もなかった。1944年12月から、南方の戦線がアメリカ軍に押され出したので、師団は第14方面軍隷下に移り、これらの連隊はフィリピン・ルソン島に送られてアメリカ軍と交戦し、山岳地帯で持久戦を行っている最中に終戦を迎えた。終戦後ただちに、日本軍隊は解体されたので、これらの連隊の兵士も日本の本土に送還された。

特筆しなければならないことは、日本軍の将校が軍刀を吊りだしたのは、1937年



に日中戦争が起こってしばらくしてからで、それ以前は指揮刀と称するサーベルを吊っていた。サーベルでは人間を切ることはできなかった。そして、全ての将校が軍刀を吊るようになったので、大量生産の日本刀が製造されたが、人を2-3人切れれば刃がかけてしまうような「なまくら刀」であった。戦場ではもっぱらサーベルと同じように指揮刀として使われた。それから、兵士が吊っていたのはごぼう剣とよばれる細い30センチくらいの長さの刀で、これを銃の先につけて敵を刺し殺すというものであった。ごぼう剣は鉛筆削りに使われても、人間の首は切れない。また、下士官は曹長に進級すると、准士官としてサーベルを吊るせるようになった。この当時の軍人の軍刀に関する証言は、1930年生まれの人、即ち私の証言である。1936年に、日本兵士が刀で韓国女性の首を斬ったということは、起こり得ないことである。また、私は中国の東北部、即ち満州に住んだ経験もある。

チョン・オクスンさんは1920年生まれであるから、13才のときに日本兵の守備兵に襲われて拉致されたのは1933年である。日本陸軍が朝鮮半島に、日本内地と同じような師団を設置してから13年後のことである。朝鮮半島における日本軍の軍律も内地におけるのと同様であった。勿論兵士専用の慰安所はなかった。日本兵が女の子を拉致して、反抗したからと首をはねるなどは、到底あり得ないことである。そのようなことをすれば、ただちに軍法会議にかけられたことであろう。

昭和42年12月20日に新潮社から野間宏氏の「真空地帯」が発刊された。この著

書はかつての日本軍隊の兵営の内部の生活を描いたもので、平成2年までに20版を重ねている。かつて、日本軍隊の兵営の内部で行われた自分より下の者に対する陰湿な“いじめ”が書かれてある。1944年に大学を卒業するとすぐ陸軍に召集され、千葉県習志野の連隊で初年兵の訓練を受けた経験のある友達が、「今でも、習志野という言葉を聞くと身震いがするほど、古参の下士官による制裁、ことに大学卒の者にたいする制裁はすごかった」と話していた。しかし、“いじめ”によって兵を死なせたに者にたいしては、軍法会議にかけられて厳しい処罰が下された。確かに中国の戦場では、日本軍による強姦事件も多かったらしいが、女の子の首を全員の見ている前で刎ねるといようなことが、1933年の朝鮮で行われたとはあり得ない。当時の生き証人がもういなくなった70年後に、こういう実際に起ったとあり得ないことを言い出すのは本当に卑怯だと思う。ことに1933年頃には、首をはねられるような軍刀を将校も下士官も吊ってはいなかったのは前述したとおりである。韓国女性の首を刎ねたのは、本当に日本の兵士だったのであろうか。事実を確認すればするほど、話の信憑性を疑いたくなる。

また、ファン・ソギョンさんは中国の牡丹江市に連れて行かれたとのことであるが、当時の牡丹江市は満州国黒竜江省東部に位置する都市で、1937年に中国東北部に満州国が建国された頃から、日本国内の様々な会社が木材加工・科学工業・食品などの工場を進出させたので、一大工業都市として人口は急増した。従って日本の関東軍の司令部も置かれてあったが、中国のような占領地ではないので、勿論兵隊専用の慰安所はなかった。ち

なみに私の弟は1943年から1年間、牡丹江の星輝中学に通った。当時、牡丹江には朝鮮人が経営する娼家が多かった。ファン・ソギョンさんが連れて行かれたのは、明らかに朝鮮人が経営する娼家に違いない。兎も角、クマラスワミ報告書にも述べられており「慰安婦問題に関しては事実の誤認や誇大が数多くみられる」と、国連人権理事会でも認めている。

私は国連のクマラスワミ報告書のなかの元慰安婦の証言が、あまりにも事実と異なっていることに呆れて、「日本統治下の朝鮮の公娼制度について、ウィキペディアで調べてみた。これを読むと、14～5才の女性を強制連行して兵士の性奴隷にするという事は、全く起こり得ないことが分かる。以下は当時の公娼制度についての記述である。

「1910年の韓国併合以降は、娼婦営業の取り締まりが強化され、1916年3月31日には朝鮮総督府警務總監部令第4号が公布、朝鮮全土で公娼制度が実施され、日本人・朝鮮人娼妓ともに、年齢下限が日本内地より1才低い17才に設定された。」

また当時、10代の少女が誘拐される事件が頻発したことも書かれてある。

「1930年代、朝鮮では10代の少女らが誘拐される事件が頻発し、中国などに養女などの名目で売却されていた。斡旋業者は恐喝や誘拐で少女を路上で捉えて売却していた。朝鮮総督府警察はたびたびこうした業者を逮捕し、1939年には中国への養女供与を禁止している。当時の人身売買や少女誘拐事件については、警察の発表などを受けて、朝鮮の主要新聞でたびたび報道された。

朝鮮総督府統計年報によると略取・誘拐で検挙された数は、朝鮮人2482人、日本人24人である。」

そして、東亜日報や毎日新報のような主要紙に、たびたび誘拐事件が掲載されていたとのことである。例えばチョン・オクスンさんが誘拐されたのは1933年である。この年の6月30日の東亜日報には、少女を路上で誘拐し中国に売却していた男がソウル市鐘路警察によって逮捕されたことを報じている。更に誘拐された少女が35才の干浜海に20ウオンで売却された後に殺害されたことを報じている。また1935年3月15日の東亜日報では「貧窮を弄ぶ悪魔！ 農村で人肉商跳梁、就職を餌に処女を誘い出す」の見出しで、ソウル近郊の農村で「人身売買」業者が処女を誘拐していることが報道されている。当時の朝鮮半島で行われた人身売買が、全て日本軍がしたことになって、国連で証言されているのは、ただ呆れるよりほかはない。そして、強制連行も含めて慰安婦の証言を全て真実と信じている日本の有識者と言われる人たちに、もう一度あらゆる資料を検討して意見を述べていただきたいと懇願する。

それにしても、韓国元慰安婦の証言のでたらめには呆れるが、70年前までの日本や朝鮮で、貧家に生まれた女子は本当に可哀想だったと思う。女性の社会的地位が低く、貧家に生まれた女子は、家族の犠牲になるのが当然という風潮のなかで、娼家に売られる女子も多かった。私は、これらの2人の証言者よりも、彼女たちを国連の場に連れ出して、こういう事を言わせる人たちを許せない。古今東西を通じて、戦場になった国で、兵士による婦女子に対する暴行がつきものであったこ

とは事実で、それだけでも決して戦争を起こしてはならないと思っている。しかし、戦後70年も経って、謝罪文も送り賠償も払っているのに、「慰安婦問題」を言い続けていることは、国際信義上の観点からも認めてはならないと思う。

私は右でも左でもない。ただ軍国主義教育を受けて育った経験から、一番恐れるのはファナティシズムである。頭から日本軍は韓国女性を「性の奴隷」にしたと、元慰安婦が語る矛盾だらけの証言を信じこみ、それに少しでも反論を唱える人を、「歴史修整主義者」と非難するのこそ、事実をよく調べもしないで自分は正しいと思いついでいるファナティシズムではないかと思う。極言と非難されることを承知で言うならば、慰安婦問題は、日本政府から金をとるために慰安婦を利用する人たち、彼女たちに同情を示して自分は人道主義者と思いたい人たちに利用されているようである。彼らから「歴史修整主義者」と言われようと、真実は語られなければならない。しかし戦争が終わってから70年、「過去は過去として葬れ」(Bygones be Bygones)として、日本政府が差し出した補償金を全額彼女たちに渡して、この問題を打ち切るのこそ最良の方法を思われる。

そして、私が最も遺憾と思うのは、このような元慰安婦による誇大証言が、国連人権委員会のような国際的な公の場で語られ、日本の名誉をいたく傷つけられていることに対して、多くの日本人は全く無関心か、知らされていないことである。そして、更に許せないのは、これらの事実の誤認や脚色された証言を真実と信じて書き立てている日本人がいることである。10月13日の朝日新聞の「オ

ピニオン&フォーラム欄」に「首相は元慰安婦に手紙を書いて」という投書が掲載された。投書者は静岡県にお住まいの69才の竹野昇氏である。(あえて本名を出ささせていただく。)竹野氏は元慰安婦らが暮らす「ナムの家」を3回訪問していらっしゃる。「存命中にお詫びしなければ、彼女たちが受けた苦痛や苦しみ、怒りを和らげることはできない。安倍首相に心のこもった『お詫びの手紙』を書くことを求める。」彼も明らかに、慰安婦は強制連行され、日本兵士の性の奴隷にされたと信じている一人であろう。この投書の主は、村山総理と河野総理と2人の総理が過去に謝罪文を送っていることも、10億円を過去に一回、そして今回も10億円を払うことをご存知ないのであろうか。2007年に米国議会下院の外務委員会のアジア・太平洋環境小委員会で開かれた「韓国人慰安婦」に関する聴聞会で、ローラ・バーシャル議員(共和党)は、「日本の前世代の過ちで現世代が処罰を受けてはならない」と述べているのではないか。現世代の安倍首相は謝罪文を送る必要はない。そして、竹野氏のような方がいらっしゃるかぎり、我々戦中派も声を挙げていかなければ、事実は正しく伝えられないと思っている。

編集者注：1945年8月15日に、日本は連合軍に降伏して、同年9月5日から、日本はマッカーサー大将(後に元帥)の率いる連合軍総司令部の占領下におかれた。そして、日本軍から徹底的に武器を回収するとのことで、最寄りの警察署から我が家にも、「占領軍総司令部から軍刀・拳銃の回収に来るから、用意しておくように」という通達がきた。それから2週間後に、私が学校から帰ってくると、母が「今日の午後、お巡りさんと一緒にアメリカ

軍の将校がジープでやってきて、日本刀と拳銃を差し出すようにと言われたわ。日本刀と拳銃は夫が沖縄に持って行きましたと言って、おいていったサーベルを3本渡したら、それで納得してサーベルを持って帰っていったのよ。武器の回収は徹底しているようね」と言った。現在、銃による犯罪が増加しているアメリカ社会を見ていると、当時の連合軍総司令部が徹底的に日本から武器を取り上げたことを思い出して今昔の感に堪えない。この逸話も、あの時代に生きた人世代の事実証言である。

